

ブルジョア的「改良」と革命的社会民主主義者の改良

ふたたび国会内閣について

「どちらかをえらばなければならない」——こういう議論によって、日和見主義者はいつも自己弁護をしてきたし、また現にしている。なにか大きな事がらを一挙に達成することはできない。小さくはあるが、達成できることをめざしてたたかうべきである。だが、達成できるかどうかをどうやってきめるのか？ 最大多数をしめる党またはもっとも「有力な」政治家たちの同意によってである。政治家のますます大きな部分が、これこれのささいな改善に同意すればするほど、それをかちとることはますます容易になり、それはますます達成できるものになる。大きな事がらを目標とするさいには、空想家であってはならない。敏腕な政治家となって、ささいな事がらにたいする要求に同意する能力をもたなければならない。しかもこのささいな事がらは、大きな事がらをめざす闘争を容易にする。われわれはささいな事がらを、大きな事がらをめざして闘争するさいの**もっとも確実な一段階**とみなす、と。

革命家とちがって、日和見主義者と改良主義者はみな、こう論じている。右翼の社会民主主義者は、国会内閣についてまさにこう論じているのである。憲法制定議会は大きな要求である。この要求を、いまずぐかちとることはできない。この要求にはまだけっして全部のものが意識的に賛成しているわけではない。（この要求に賛成しているものは、国会の一小部分にすぎない。）ところが、国会内閣にたいしては、国会を**あげて**、すなわち大多数の政治家が、**つまり「全人民」**が、賛成している。現存の悪を**えらぶか**、それとも、それを**ごくわずか**匡正することをえらぶか、どちらかをえらばなければならない。なぜなら、「ごくわずか」匡正することには、総じて現存の悪に不満をいだく人々の最大多数者が、賛成を表明しているからである。そして、小さな事がらを達成して、われわれは大きな事がらをめざす闘争を容易にするであろう、と。

くりかえして言うが、これは、全世界のすべての日和見主義者の基本的で、典型的な議論である。では、こういう議論は、不可避免的に、どういう結論へ導くであろうか？ どんな革命的な綱領も、革命的な政党も、革命的な戦術もいらない、という結論へ導く。必要なのは改良、しかもそれだけである。革命的社会民主主義派はいらない。必要なのは、民主主義的改良と社会主義的改良の党である。実際のところ、現存するものに不満を感じている人間が、この世には**つね**に存在する、ということは明らかではあるまいか？ もちろん、**つね**に存在している。おなじくまた、この不満な状態の**ごくわずかな**匡正にたいして賛意を表明するものが、**つね**に不平家の最大多数であるということは、明らかではあるまいか？ もちろん、**つね**にそうである。したがって、われわれのなすべきこと、先進的な、「自覚した」人間のなすべきことは、悪の匡正についてのもっとも小さな要求を、**つね**に、支持することである。これがもっとも確実で、もっとも実際のな事であって、「根本的」な要求などといったものについてのいろいろな話はいずれも、「空想家」のおしゃべりにすぎず、「革命的な空文句」にすぎない。**どちらかをえらばなければならない**——しかも**つね**に、現存の悪をえらぶか、それともこの悪のはやりの匡正策のうちでもっとも**つつましい**ものをえらぶかしなければならぬ、と。

ドイツ社会民主党の日和見主義者たちは、まさにこのように論じたのである。彼らは言う、社会主義者取締法の撤廃、労働日の短縮、疾病保険、等々を要求する社会自由主義的流派がある。こういう要求には、ブルジョアジーのすくなからぬ部分も賛成している、分別のない論難をして、彼らを突きはなしてしまってはならない。彼らに手をさしのべ、彼らを支持せよ——そうすれば諸君は、敏腕な政治家となり、小さくとも現実的な利益を労働者階級にもたらすであろう、そして、諸君の戦術によって害をうけるのは、「革命」という空語だけであろう。いずれにせよ、革命をいまずぐおこすわけにはいかない。反動をえらぶか、それとも改良をえらぶか、ビスマルクの政策をえらぶか、それとも「社会的帝国」の政策をえらぶかを、**どちらかをえらばなければならない**、と。

フランスの社会主義大臣たちも、ベルンシュタイン派に似たような議論をしていた。反動をえらぶか、それとも実際に実現できる一連の改良を約束するブルジョア急進派をえらぶか、**どちらかをえらばなければならない**。この急進派を支持し、彼らの内閣を支持しなければならぬ。社会革命うんぬんといった言辞は「ブランキ主義者」、「無政府主義者」、「空想家」等々のおしゃべりにすぎない、と。

では、これらすべての日和見主義的議論の基本的な誤りはどこにあるか？ それは、こういう議論では、歴史の唯一の**現実的な推進力**としての階級闘争についての社会主義的理論が「連带的」、「社会的」進歩についてのブルジョア的理論によって、**実質上**おきかえられる点にある、社会主義すなわちマルクス主義（いまでは非マルクス主義的な社会主義などをまじめに論じることはできない）の学説によれば、歴史の真の推進力は、革命的な階級闘争である。改良は、この闘争の副産物である。副産物というわけは、改良は、この闘争をよわめ、にぶらせようとする試みが成功しなかったこと、等々をあらわしているからである。ブルジョア哲学者の学説によれば、進歩の推進力は、あれこれの制度・施設の「不完全なこと」を意識した社会のすべての分子の連帯性である。まえの学説は唯物論的であり、あとの学説は観念論的である。前者は革命的な学説であり、後者は改良主義的な学説である。前者は近代資本主義諸国におけるプロレタリアートの戦術を基礎づけているが、後者はブルジョアジーの戦術を基礎づけている。

あとの学説からは、平凡なブルジョア進歩派の戦術が生じる。すなわち、いつでも、「より良いもの」を支持せよ、反動をえらぶか、それともこの反動に反対する諸勢力の最右翼をえらべ、という戦術が生じるのである。まえの学説からは、先進的階級の自主的な革命的戦術が生じる。われわれは、改良主義的ブルジョアジーのもっとも流布されたスローガンを支持することに自分の任務を帰着させるようなことはけっしてない。われわれは、革命的闘争の利益にとって**無条件に**有利で、プロレタリアートの自主性と自覚と戦闘力を**無条件に**たかめるような改良のスローガンだけをかかげながら、自主的な政策を行う。このような戦術によってのみ、われわれは、いつも中途半端で、いつも偽善的で、いつもブルジョアのわなか警察のわながしかけてある、**上からの改良を、害のないものにするのである**。

そればかりではない。このような戦術によってのみ、われわれは、重大な改良を現実に進めさせる。これは逆説のようにみえる。だがこの逆説は、国際社会民主主義運動の全歴史によって確証されている。すなわち、改良主義者の戦術は、改良の実施とその現実性をもっとも**拙劣**にしか保証しない。革命的階級闘争の戦術は、両者のいずれをも、もっと

もりっぱに保証する。**実際には**、改良は、ほかならぬ革命的な階級闘争によって、その自立性によって、その大衆的な実力によって、その頑強さによって、よぎなくされるものである。この闘争の強さに応じてのみ改良も現実的なものになるのであるが、この改良は**いつでも**いつわりにみち、表裏があり、ズバトフ精神にみちみちている。自分のスローガンを改良主義的ブルジョアジーのスローガンと融合させるとき、われわれは革命の事業を**よわめ、したがってまた改良の事業をもよわめる**ことになる。なぜなら、われわれは、それによって革命的階級の自立性、根気よさ、勢力をよわめるからである。

いったいなんのために、革命的国際社会民主主義運動のこのイロハを、繰り返すのかと、ある読者は、多分、言うであろう。それは、『ゴーロス・トルダー』や多くのメンシエヴィキの同志諸君がそれをわすれているからである。

国会内閣、すなわちカデット内閣は、まさにこのよういつわりにみちた、表裏ある、ズバトフ的な改良である。カデットと専制との取引の試みとしての、この改良の現実的な意義をわすれることは、マルクス主義を、自由主義的ブルジョアの進歩の哲学とおきかえることを意味する。**このような改良を支持し、それを自分のスローガンのうちにくわえる**ことによって、われわれは、プロレタリアートの革命的意識の明確さをも、プロレタリアートの自立性をも、その戦闘能力をも、**よわめる**。自分の古くからの革命的スローガンを**完全に**支持することによって、われわれは現実の闘争をつよめ、したがってまた、改良を実現する公算をも、**改良を反動に役だてず**に、革命に役だてる**可能性**をも、つよめる。われわれは、この改良のうちにあるいつわりにみちたもの、偽善的なものをすべてカデットのうえになげすて、——改良のありうべき積極的な内容をすべてみずから**利用する**。こうした戦術のもとでのみ、われわれは、トレポフ氏らとナボコフ氏らの足のすくいあいを利用して、この尊敬すべき両軽業師を穴のなかへ投げこむであろう。こうした戦術のもとでのみ、ビスマルクがドイツ社会民主党について言ったように、歴史はわれわれについてかたるであろう——「社会民主党がなかったならば、社会改良もなかったであろう」と。もし、**革命的プロレタリアート**がなかったならば、十月十七日もなかったであろう。もし十二月がなかったらば、国会召集を拒否しようとする試みは、はばまれなかったであろう。革命のその後の運命を決定する別な十二月もまだくるであろう……

あとがき。われわれが『ゴーロス・トルダー』第6号の主張を読んだときには、この論文はすでに書きあげてあった。同志諸君は誤りを正そうとしている。彼らは、国会内閣が大臣の職をひきうける**まえに**、すべての地方で戒厳状態とあらゆる保安機関を廃止することをも、完全な大赦をも、すべての自由の回復をも要求し、かつ達成することをのぞんでいる。大いにけっこう、同志諸君！ 国会内閣についての中央委員会の決議のなかへ、これらの条件を挿入するように、中央委員会に申請したまえ。これを自分でやってみたまえ——そうすれば、国会内閣すなわちカデット内閣を支持する**まえに**、国会またはカデットが革命の道に立つように要求しかつそれを達成することが必要だ、ということになる。またカデットを支持する**まえに**、カデットがカデットでなくなるように要求しかつそれを達成することが必要だ、ということになる。注) ……は本文中の略

第11巻『エーホ』第六号 1906年6月28日

ポイント

ブルジョア哲学者の学説によれば、進歩の推進力は、あれこれの制度・施設の「不完全なこと」を意識した社会のすべての分子の連帯性であるという。そして、日和見主義者と改良主義者は、闘争の進め方を、反動をえらぶか、それとも改良をえらぶか、の二者択一で考える。そして、大きな事がらを目標とするさいには、空想家であってはならない。敏腕な政治家となって、ささいな事がらにたいする要求に同意する能力をもたなければならない。なぜなら、このささいな事がらは、大きな事がらをめざす闘争を容易にし、大きな事がらをめざして闘争するさいのもっとも確実な一段階となる、とみる。

しかし、実際には、改良は、ほかならぬ革命的な階級闘争によって、その自立性によって、その大衆的な実力によって、その頑強さによって、よぎなくされるものである。自分のスローガンを改良主義的ブルジョアジーのスローガンと融合させるとき、革命の事業はよわめられ、したがってまた改良の事業もよわめらることになる。なぜなら、われわれは、それによって革命的階級の自立性、根気づよさ、勢力をよわめるからである。この改良の現実的な意義をわすれることは、マルクス主義を、自由主義的ブルジョアの進歩の哲学とおきかえることを意味する。このような改良を支持し、それを自分のスローガンのうちにくわえることによって、われわれは、プロレタリアートの革命的意識の明確さをも、プロレタリアートの自立性をも、その戦闘能力をも、よわめることとなる。

マルクス主義者は、革命的な階級闘争を歴史の真の推進力とみる。そして、改良は、この闘争の副産物であるとみる（副産物というわけは、改良は、この闘争をよわめ、にぶらせようとする試みが成功しなかったこと、等々をあらわしているからである）。だから、自分の古くからの革命的スローガンを完全に支持することによって、われわれは現実の闘争をつよめ、したがってまた、改良を実現する公算をも、改良を反動に役だてずに、革命に役だてる可能性をも、つよめる。われわれは、革命的闘争の利益にとって無条件に有利で、プロレタリアートの自主性と自覚と戦闘力を無条件にたかめるような改良のスローガンだけをかかげながら、自主的な政策を行う。このような戦術によってのみ、われわれは、いつも中途半端で、いつも偽善的で、いつもブルジョアのわなか警察のわながしかけてある、上からの改良を、害のないものにするのである。